

ドナウ の 四季

2014年・新春号・No.21

音楽の魔法	山本 忠通	1
追悼： わが師、関恒義のこと	盛田 常夫	2
今岡十一郎(1888-1973)生誕125年、没後40年にあたり		
	梅村 裕子	4
秋の日本冒険旅行	ホルヴァート・ダーヴィド	6
鋼鉄の街	ヴレタ・ダーニエル	7
留学生自己紹介	井上 元輝・今井 文音・宮原 孝治・白井 彩	8
みどりの丘日本語補習校	ラパイ 絵梨香	12
ハンガリーで身についた「粘り強さ」	松沼 綾子	13
2013年ゴルフ個人的回想録	竹内 寿志	14
第19回大吉杯マッチプレー決勝戦立会人観戦記	渡辺 彰	15
スポーツ行事・運動サークル情報		16
初外国人ダンサーは日本人!		17

音楽の魔法

山本 忠通

改修工事を経て、1907年設立当時の姿を再現したリスト音楽院コンサートホール



小林研一郎ハンガリーデビュー40周年記念コンサート

- 3月14日 19:30 リスト音楽院ホール
マーラー交響曲第2番「復活」
国立フィルオーケストラ、国立合唱団
ソリスト： Szaboki Tunde, Widermann Bernadette
- 3月19日 19:30 芸術宮殿バルトーク国民音楽ホール
オルフ「カルミナブラーナ」、ガランタ舞曲、ロココ協奏曲
ハンガリー・ラジオオーケストラ、ハンガリーラジオ合唱団、児童合唱団
ソリスト： Perenyi Miklos
- 3月22日 19:00 バルトーク音楽ホール（ペーチ）
オルフ「カルミナブラーナ」、ガランタ舞曲
ハンガリー・ラジオオーケストラ、ハンガリーラジオ合唱団、児童合唱団
- 3月26日 19:30 リスト音楽院ホール
ベートーヴェン交響曲「第9番」
リスト音楽院学生オーケストラ、リスト音楽院学生合唱団
- 3月30日 19:00 リスト・フェレンツ文化会館（ショブロン）
ベートーヴェン交響曲「第3番」（英雄）、ガランタ舞曲、エグモンド序曲
ジュールオーケストラ
- 3月31日 19:00 バルトーク音楽ホール（ジュール）
ベートーヴェン交響曲「第3番」（英雄）、ガランタ舞曲、エグモンド序曲
ジュールオーケストラ
- 4月3日 19:30 リスト音楽院ホール
セビリアの理髪師序曲、ガランタ舞曲、ペリリオーズ「幻想交響曲」
MAVオーケストラ

ハンガリーの人々は音楽を楽しむ。コンサートに行くと老若男女と出会う。オーケストラもドイツ・グラマフォンの格付けで世界9位にランク付けされているブダペスト・フェスティバル交響楽団を始めブダペストと大きな地方都市に立派なオーケストラを数多く有し、また、オペラ、バレエも盛んである。

私は音楽が好きである。ハンガリーは、その意味で格好の赴任地である。

私が始めてクラシック音楽に強く惹かれたのは、中学一年の時である。授業で聞いたベートーヴェンの田園交響楽に魅せられてレコードを始めて自分で買い求めた。当時のEP版という小振りのレコードで、ジャケットはヨーロッパの美しい田園風景の写真であった。何度も蓄音機で聴いたが、佐世保という九州の地方都市では、本物のオーケストラを聴く機会はなかった。それが中学二年の時に父がロンドンに赴任することになった。

英国は中高一貫教育である。学年を超えて生徒達が交わっている。ある日、年長のリーダー格の生徒が、低学年の我々がたむろしている所に来て、ロイヤル・アルバート・ホールのプロムナード・コンサートに行かないかと誘ってきた。プロムナード・コンサートは若い人向けに一流の音楽家が安い入場料でコンサートを行う祭典である。早速プログラムを見ると、ベートーヴェンの田園交響楽があった。当日は、初めての生のオーケストラを聴くことで興奮していた。サー・エイドリアン・ボウルト指揮のハレー交響楽団の演奏であった。会場の雰囲気もあったが、音も違っていた。好きな曲だけに、演奏を聴くと共にメロディーが頭の中に出てきて、自分が想い描いているよりも魅力的なのに魅惑され、身体全体が音楽にすっかり包み込まれてしまった。会場も酔いしれていた。コンサートが終わっても興奮は醒めず、一緒に行った仲間と

夜道を歩くのが心地良かったのを覚えている。

音楽会では、時々魔法が起きる。指揮者も、オーケストラも聴衆も全てが一つになってしまうのである。そのような時は、指揮者が指揮しているのか、オーケストラに合わせて指揮者が身体を動かしているのか判らない。指揮者もオーケストラの弾き手も聴衆も全てが音楽の虜になって、音楽の命ずるままに音の作り出す渦の世界に引き込まれて溺れてしまうのである。プロムの一夜はそのような魔法の夕べであった。このような魔法は、その後も何度か経験した。

同じロンドンのことである。しかし、はずっと後で、既に大使館に勤務していた。妻と二人でロイヤル・フェスティバル・ホールに居た。指揮者はセルジウ・チェリビダッケ、オーケストラはロンドン・シンフォニー交響楽団であった。当時のロンドン・シンフォニーは評判高く、チェリビダッケもリハーサルの鬼と言われていた。曲目は、ベートーヴェンの交響曲第九番で、期待していた。始まると一糸乱れぬ完璧な演奏が流れ出した。チェリビダッケは、独特のお尻を振るような指揮振りで、ちょっと滑稽な感さもあるのだが、音楽の厳しさにそのような印象は瞬く間に消えてしまった。完成度と迫力に圧倒され、瞬きをしたかさえも判らないほど椅子に金縛りになっていた。終わった後の緊張が解ける心地よさと本物の一流を味わった満足感が残った。周りの聴衆も満足きった表情で立ち上がっていた。

より小さな演奏会でも魔法が起きることがある。アイザック・スターンの死を悼むボストンでの友人を中心とする小さな催しで100人前後の集まりだった。故人の友人だったピアニストのエマニュエ

ル・アックスが追悼の曲としてシューベルトのピアノソナタ21番を弾いた。名前だけの簡単な紹介を受け、ネクタイも着けない出で立ちで、ずっと椅子に座るとゆっくりと弾き始めた。それまでに聴いたこのソナタのどれよりもゆっくりとしかし太い音で語りかけてきた。ピアニストは泣いていない。しかし、音楽は泣いていた。集まったスターンの死を悼む人全てに替わって、この演奏は悲しみを込めて響いていた。

オペラでも魔法は起きる。タンゲルウッド音楽祭のことである。指揮者は小澤征爾、ボストン・シンフォニー交響楽団の演奏で演目はサロメ。サロメを演じたのは、メトロポリタン歌劇団所属のデボラ・ヴォイクト。コンサート形式のオペラで、ヴォイクトにとっては、初めてのサロメであった。サロメは、私の最も好きなオペラの一つである。最前列に陣取って楽しんでた。ヴォイクトのやや太めのソプラノの声はサロメに良く合っていた。サロメが銀の皿にヨハナンの首を載せて接吻するシーンで、ヴォイクトは、サロメになりきって恍惚として歌い上げた。サロメがヨハナンの唇に接吻すると魔法が掛かった。ヴォイクトの表情が恍惚として、声が更に透き通ると、オーケストラが一つの生き物になった。奏者は、彼女の声に釣られて身体を前後左右に揺らしながら踊っているかのように演奏し、指揮する小澤征爾氏は、取憑かれた様な勢いで手を動かしている。聴衆は、息をも吞めないでサロメの狂気の世界に引き込まれていった。

ハンガリーの魔法はどのようなものか。魔法に掛かるのが楽しみである。

（やまもと・ただみち

駐ハンガリー日本国大使）

追悼： わが師、関恒義のこと

盛田 常夫

去る10月23日、関恒義一橋大学名誉教授(享年89歳)が他界された。還暦を過ぎた頃に気胸を患い、体調を崩しながら生活を送られていた。といっても、大学院門下生は長らく先生と連絡が取れないまま、たまに聞く風の便りで、ご健在を知るのみであった。

大学院門下生が一堂に会し、教科書『現代の経済学(上)・(下)』(青木書店、1978年)を共同執筆し、還暦記念にハンガリーの経済史家マーチャーシュ・ Antal『近代経済学の歴史(History of Modern non-Marxian Economics)』(大月書店、1984年)を翻訳出版したのが、門下生の共同事業の最後となった。その後、1988年に関教授は一橋大学を退官され、田舎で静養されたこともあって、門下生との距離が次第に遠くなった。学部卒業生との付き合いは息長く続いていたが、大学院門下生との付き合いは次第に絶えてしまった。私が1988年にハンガリーへ赴任し、そのまま居ついてしまったこともあって、門下生を束ねる人がいなかった。

関恒義の主要な仕事は現代経済学批判であったが、その流れを受け継ぐ門下生は、私を除いていない。門下生を代表する資格もないが、私が語らなければ、その業績が顧みられることもない。長年の不義理を償うべく、ここに追悼の意を込めて、関恒義を彼の世に送り出したい。

関恒義は1924年に長野県で生まれ、16歳で東京の中学校に転校し、卒業後に東京商科大学(現、一橋大学)予科に入学し、本科進学とともに中山伊知郎ゼミに所属した。当時の中山ゼミには、戦後の一橋経済学を担う俊英たちが学んでいた。中山ゼミは杉本栄一ゼミと並んで、東京商科大学の人気ゼミナールであった。

関恒義は学徒出陣で終戦までの1年間、国内の基地に配属された。若い幹部候補生が荒れた下士官たちを束ねるのは容易でなく、一緒に大酒を飲みながら、なんとか乗り切った話は何度か聞いた。酒とたばこはその時から身についた習慣になった。それが気胸を患う遠因にもなった。戦時環

境では数理経済学を勉強するしかなく、中山ゼミを選んだ理由を語られた。

終戦後、中山教授の助手として労使交渉の裏方の仕事をやりながら、数学の本格的な勉強のために、1948年から東大理学部弥永昌吉教授のゼミナールの研究生となり、数学を学ぶことになった。当時の弥永ゼミには、後に日本の数理経済学の草分け的存在になった二階堂副包や立教大学の数学教授になった赤根也がおり、その縁で赤氏の妹君を娶ることになった。このゼミナールで、関恒義は二階堂氏らと一緒に、ハンガリー人数学者ノイマンが着想した経済均衡モデルを研究した。二階堂氏はその後、アメリカに渡り、一般均衡モデルの別証明を与えて、国際的に知られることになった。二階堂教授の『現代経済学の数学的手法一位相数学による分析入門』(岩波書店、1960年)は長らく、この分野を専攻する者のバイブル的書物となった。これはノイマンが数ページの論文にまとめたモデルを、一から解説し理解するための本だと言って良い。

関先生は一橋大学教養課程で「数学」を、経済学部で特殊講義(社会主義経済学)を担当されたが、次第に問題関心が数理経済学から離れ、経済学批判へと向かうことになった。非マルクス経済学から出発して、マルクスの手法を使った現代経済学批判を展開するという非常に稀な存在となった。1950年代から60年代にかけて、日本の経済学界ではいわゆる近代経済学とマルクス経済学との激しい鏝迫り合いが展開された。マルクス主義の伝統の強い日本の経済学部で、近代経済学が次第に勢力を増していく時代である。1956年から1957年に東洋経済新報社から出版された『講座：近代経済学批判』は、当時のマルクス主義理論家を総動員した近代経済学批判である。

非マルクス経済学とマルクス経済学を内面的に比較検討する杉本栄一教授のゼミナールからも、伊東光晴や宮崎義一など非常にユニークな人材が多く育っていた。関恒義は中山伊知郎門下から出発

し、杉本栄一が対象としていた問題に接近し、近代経済学の内面的批判を超えるイデオロギー的批判を展開することになった。関恒義の登場は、近代経済学から転身した気鋭の学者の批判として注目された。1960年の安保闘争で社会が騒然としていた時期である。関恒義は杉本栄一の内面的批判を超えて、近代経済学のイデオロギー的性格を暴くことが近代経済学批判の方向だと主張し、杉本門下の末永隆甫教授と論争された。今ではこの種の論争がなくなってしまい、何とも物足りないが、1960年前後は血気盛んな論争がたたかわされた。

関恒義の近代経済学批判の集大成が『現代資本主義と経済理論』(新評論、1968年)に結実した。なかでもサムエルソン経済学を真っ向から批判する切れ味に、興奮したのを覚えている。当時、私が在学した国際基督教大学では、サムエルソンの原書(第6版)をもとに、アメリカ人経済学者が講義していた。都留重人先生の監修でサムエルソン『経済学』の日本語訳が出版されたのが1966年で、一橋大学都留重人門下生による共同作業であった。東大駒場キャンパスでは、内田忠夫教授がこれを使った授業を開始され、玉野井芳郎教授も『マルクス経済学と近代経済学』(日本経済新聞社、1966年)を使って講義されていた。いわば1960年代後半はマルクス経済学と近代経済学のせめぎ合いの様相を呈していた。

私は国際基督教大学に非常勤で講義されていた杉本栄一門下の種瀬茂一橋大学教授に卒論指導をお願いし、何度か国立キャンパスの官舎をお邪魔した。種瀬先生は学長在職中の1986年に、若くして心筋梗塞で亡くなられた。種瀬教授は杉本門下の秀才、関教授は中山門下の異端児で、関先生が1歳年上だった。

国際基督教大学の学生でありながら、小平の一橋教養課程で関先生の講義を聞き、国際基督教大学がロックアウトになった時には、東大駒場キャンパスへ玉野井先生や堀尾輝久先生の講義を聴きに行っ

た。後に、堀尾先生とは日本書籍の中学「公民」の教科書編集で一緒になり、また玉野井先生のお嬢さんとは、法政大学社会学部パソコン実習に非常勤講師で参加していただき、一緒に教科書を編集した。不思議なめぐり合わせである。

1960年代半ばは中国の紅衛兵運動が盛んで、菊池昌典先生は駒場の講義で、「造反有理」と板書して春の授業を始めたのを覚えている。スターリン主義批判の大論陣を張ったことで知られており、中国の動きに感情を動かされていたようだった。ヴェトナム戦争が拡大し、ソ連圏では経済改革が叫ばれ、利潤導入が資本主義の復活へ進むのが議論された時期である。この時も大学が長期間ロックアウトになり、塀に囲まれたキャンパスで、国際基督教大学出身で当時スタンフォード大学助手だった雨宮健氏から、「一般均衡を証明する不動点定理」の講義を受けた。1969年のことである。その後、雨宮氏はスタンフォード大学教授となり、日本の数理経済学者でもっとも国際的に知られる学者(論文引用数第1位)となった。

余談になるが、1988年にハンガリーに赴任する前、菊池先生から東大駒場で「コルナイ経済学」の講義をして欲しいという依頼を受け、半期の講義をおこなって慌ただしく日本を旅立った。その菊池先生もすでに他界された。

今から振り返れば、1960年代から1970年代は経済学の百家争鳴時代であった。ハンガリーにはノイマンの数理経済学を継承するブローディ・アンドラーシュを中心とする数理経済学派と、1人で正統派経済学(一般均衡学派)に立ち向かったコルナイ・ヤーノシュがいた。コルナイ『反均衡の経済学』(日本経済新聞社、1975年)の原書出版は1971年である。主流派経済学への真正面からの批判は、大学院生だったわれわれの知的関心を刺激したのを覚えている。

こういう歴史環境のなかで、関先生は現代経済学のイデオロギー批判を展開され、この分野で貴重な存在となった。関先生は近代経済学を厳しく批判しながら、他方で経済学における数学利用には非常に寛容

であった。数理経済学から出発したバックグラウンドを垣間見ることができた。大阪大学から二階堂教授を、津田塾大学から位相数学・代数学の松坂和夫教授を一橋大経済学部へ招聘するのにも尽力された。関先生はとくにノイマンを受け継ぐ数理経済学の方には肯定的な評価を与えていた。そのこともあって、経済学への数学利用を無意味と考える経済統計研究会の理論家とはギクシャクした関係にあった。近代経済学にたいするイデオロギー的批判で関先生と同じ方向を目指していた山田耕之介(立教大学教授)も、経済統計研究会系に属する学者で、数学利用に否定的だった。私が法政大学で教鞭をとって間もなく、山田先生から立教大学への誘いを受けた。法政飯田橋キャンパスの荒れた状態に失望し移籍も考えたが、職について間もない時期であり、法政への招聘を仲介された田沼肇先生からせめて5年は在職してくれと懇願され、立教への移籍を諦め、ハンガリー留学の道を選択した。なお、山田先生は立教大学退職後、若き日に留学したポーランドへ移住された。ブダペストから何度かコンタクトを取ろうとしたが、連絡が取れないまま、ワルシャワで他界された。

関先生は大学院生の指導でも数学利用を積極的に推奨された。門下生は産業連関論分析などを研究しても、近代経済学批判の研究に向かうことはなかった。その意味で、近代経済学のイデオロギー批判は、関恒義一代限りの仕事であった。私も大学付属の経済研究所で国民経済計算論を研究されていた倉林義正教授に教えを請い、それが縁で1978年にハンガリーに留学することになった。関先生と倉林先生はほぼ同じ時期に中山ゼミで学ばれた仲で、関先生は国民経済計算論の研究を後押しされた。倉林先生は1980年代に国連統計委員会(UN Statistical Commission)議長に就任され、公人としてハンガリー中央統計局を訪問されたこともある。倉林ゼミに属していたわけではなかったが、ブダペスト訪問時にはクラシック通である倉林先生と常に音楽三昧のプログラムを組んで一緒にした。倉林先生は法政大学田沼肇教授とは小学校の同級生という奇遇だった。

関先生の近代経済学批判は非常に厳し

いものであったが、一橋大学のリベラルな風土を大切にされていた。我々の大学院時代の一橋大学には実に多彩な経済学者が経済学部と経済研究所に集まっており、東大経済学部をはるかに凌ぐ人材と問題意識に富んでいた。私が大学院へ入学した時にはすでに退官されていたが、産業・景気循環論の日本の草分け的存在である篠原三代平先生もまた中山伊知郎門下で関先生の先輩にあたり、私と同じ富山県高岡市の出身である。社会主義崩壊に関心を抱いておられ、財団法人統計研究会会長として何度も研究会に呼んでいただいた。翻訳書や著書を贈る度に、直筆のお手紙を日本からいただいたが、2012年に他界された。

ヴェトナム戦争における社会主義勢力の勝利によって、当時すでに顕在化していた社会主義経済の矛盾が、一時的に覆い隠されてしまった。そのことがさらに社会主義圏の内部矛盾を拡大し、歴史は社会主義圏崩壊へと進んだ。歴史のアイロニーである。1980年代のソ連や東欧社会主義国では、コルナイ・ヤーノシュ『不足の経済学』が「どん詰まり社会主義」の理論的解明を与え、この書が体制改革のバイブルとなって現実の体制崩壊へと突き進んだ。日本でもコルナイの著作は専門家の間で盛んに読まれたが、それが政治の世界に反映することなかった。

社会主義崩壊を関先生がどのように認識していらっしまったのか、今では知る由もないが、旧左翼へ宛てた「20世紀社会主義への惜別のメッセージ」である拙著『ポスト社会主義の政治経済学』(日本評論社、2010年)やコルナイ『コルナイ・ヤーノシュ自伝』(日本評論社、2006年)は、ともに関先生のご子息にお送りした。お手許に届いたかどうか。

今ではもう現代経済学批判を展開する人もいなくなり、若い研究者たちは社会問題意識をもつことなく、淡々と論文になりそうなテーマを追いかけている。何とも語らない時代になった。今こそ、再び関恒義のように、果敢に正統派経済学に真正面からぶつかる俊英が必要とされる時代なのだが。関先生も、そういう想いをお持ちになって、旅立たれたのではないかと思う。

(もりた・つねお 「ドナウの四季」編集長)

今岡十一郎(1888-1973)生誕125年、没後40年にあたり

梅村 裕子

ハンガリーで生活していると、建物の壁に誰かを記念するという大理石碑をしばしば目にする。日本人でもよく知られている作曲家リストや詩人ペテーフらだけでなく、各々の分野で社会に貢献した人々の業績を石碑に記して、記憶に残すことをハンガリーの人々はとても大事にしている。そんな名誉ある石碑に初めて日本人が登場した。ブダペスト中心部にあるカフェのギャラリーに掛けられた大理石には次のように刻まれている。「1920年代当地で活動し、ハンガリーと日本の架け橋になった今岡十一郎を、彼が好んだこのセントラルカフェに記念して」。

記念碑は両国の国交140年と国交回復50年を記念した2009年、日本友好協会と日本人商工会の尽力により設置された。筆者は今岡十一郎の業績についての書籍『日本海からドナウ河畔へ』をハンガリーで出版した縁があって石碑設置に関わった。それから4年が経ち、今年は今岡の生誕125年、没後40年に当たるということで、日本友好協会のヴィハル会長が中心となって石碑に献花し、再び今岡と両国交流を思い起こすささやかな会が11月末に開かれた。以下、当日の挨拶を元に今岡の活動について主なところを紹介する。

今岡十一郎はハンガリーと日本の交流において最初の礎を築いた人物である。第一次大戦後の困難の中、1922年に今岡はブダペストへ降り立った。語学の才能に恵まれ、ハンガリー語の習得は短期間で相当レベルに達したようだ。間もなく依頼されるまま日本についての講演や新聞への寄稿を始める。最初は当時欧州にあった黄禍論を弁明するものだったが、その内幅広いテーマで話をするようになる。それは伝統や習慣、日常生活からは文学、都市案内まであらゆる領域に及んだ。ハンガリーには自民族の起源からも東洋に対する親近感があって、日本への関心は高かった。そういった背景も手伝って今岡の講演や新聞

記事はまたたく間に注目され、ひっぱりだこの人気講演者となったのだ。元々関心の強いところへ、あまりお目にかかったことのない日本人がそれもハンガリー語で講演する



というのだから、まるでパンダが来たかのような扱いをされたとしても不思議ではない。実際、講演の宣伝ポスターには「混雑を避けるため講演は3時と6時の二回行います」などと書いてある。今岡は人々の並々ならぬ日本への関心に触発され、お客に暖かい国民性に惹かれ、心から滞在を楽しんでいたようだ。

1920年代にハンガリーでは日本協会という友好団体が設立されているが、ここでも今岡は中心的な一人として参加した。並行して日本語の講座を受け持ち、まだブダペストに公使館がなかったので、ウィーンの日本公使館からも依頼され様々な役割を担っている。日本人訪問者の案内や通訳、情報収集、行事のオーガナイズなどなど。同時にハンガリー人からは次々と日本関連の依頼や照会が寄せられていた。それは民間人でありながらさながら私的領事とも言える仕事ぶりである。

この時期の訪問者として際立つのは1931年の高松宮夫妻ブダペスト訪問であるが、この時も案内兼通訳として同行している。今岡は滞在の最後にそれまでの記事をまとめ『ウーイ・ニッポン(新日本)』と題し

た書籍を出版し、帰国前には勲章も授かった。この地に根を下ろしハンガリー社会で最初に名前を知られることになった日本人として、輝かしい足跡を残した。彼にとってハンガリーは「もうひとつの祖国」となり、後ろ髪を引かれながらハンガリーを発つ時、別離の手紙にこうしたためた。「ここで過ごした悲しい程の美しい思い出を胸が痛むような幸せな思いで振り返り…」。

今岡は1931年、9年ぶりに日本へ帰国した。長い洋行帰りはまだ珍しく、地方新聞がハンガリーでの活躍ぶりを「花嫁候補二千人」などといささか大げさに伝えている。そして今度は日本の読者に向けてハンガリー紹介を始めた。時代の波もその活動を後押しするような方向へ進みだす。1938年両国は日本にとって初めての文化協定を締結する。働きかけはハンガリー側からで、日本は最初及び腰だったが、折りしも国際的に孤立しつつある時で、友好国を広げ、情報収集に利用するという政治的な思惑が絡み合って締結に漕ぎ着けた。こうして両国関係は公的なバックアップを得て交流に弾みがついた。戦争へ進む暗い時代の関係で偏った面もあるし、政府宣伝的な要素も見られる。しかし、日本とハンガリーは実質的な政治利害関係はそれほどなく、協定によって行われた多くの活動や行事も文化を対象にしたものがほとんどだった。

具体的にはどんな交流だったのだろう。双方の国でお互いを紹介する出版物が発行され、クラブ的な集りや講演会、展覧会があり、交換留学生が送られ、大学付属の語学学校ではハンガリー語の講座が開かれた。最も顕著な活動を手広く担っていたのが今岡である。ハンガリーとの交流や研究を目的とする日洪文化協会が設立されたのを機に、会報誌『日洪文化』を編集長として発行し、歴史、文学、伝統の紹介から政治情勢や名所案内まで幅広く書いた。会員向けの冊子とはいえ、日本で様々な分野につ

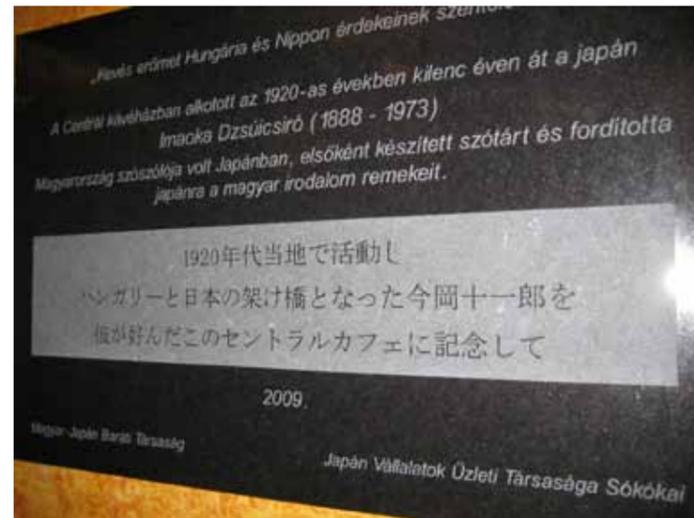
いてのハンガリーが紹介されたのは初めてのことだった。ハンガリー人に蒙古斑が出るとか、言語的に近いという現在まで伝わる話はこの時に広められた。

今岡は書籍や多くの記事でも活発にハンガリーを書いた。特に文学の翻訳ではペテーフやマダーチを始めハンガリー文学の神髄を紹介している。語学書として出した『ハンガリー語 4 週間』は戦後も長く唯一の語学書として再版を重ねた。1939年ハンガリーは枢軸同盟に参加して日本の同盟国になり、しばらくは活発な交流が続いた。しかし戦況は激化し徐々に文化活動どころではなくなっていった。

終戦とともに国交は断絶し、交流団体のすべては解散する。両国関係の上では冷戦の両陣営に分かれた暗い時代が到来した。国交回復に向けた動きが始まるのはやっと50年代半ばになってからだ。そんな中1956年のハンガリー動乱が勃発する。共産主義の国で初めて民衆が蜂起したこの事件は世界を揺るがせた。日本でも特に左派陣営には大きな影響を与えている。一方、右派が中心になって『ハンガリー救援会』が立ち上げられ、亡命難民らのために募金活動が展開された。それまで活動を休止せざるを得なかった今岡に再び情報発信の機会がやってきた。講演会で話し、募金に奔走し、集まった善意を携えて実際にウィーンへ出向いて募金を届け、難民収容所や国境までも視察している。しかし、ハンガリー再訪は遂にかなわなかった。帰国後は招待したハンガリー人の若い亡命者と共に全国を回った。当時の報告書を読むと、いかに一般の人々の関心を惹いていたかがわかる。

この後1959年には正式に国交が回復し、限られた関係ではあったが、スポーツや芸術を通してだんだん人の往来も増えた。動乱後、表向きはハンガリー関係から遠ざ

かっていた今岡は、一人でハンガリー語辞書の執筆、編纂に全精力を注いでいた。原稿は仕上がっていたが、商業ベースで採算の取れない辞書の出版は困難をきわめた。結局、自費出版に踏み切る。もう老齢で肺を患う今岡にとっては時間との闘いである。1973年、両国は新たに文化協定を結ぶことになった。調印式は東京で行われ、仮刷りで仕上がった今岡の辞書が両国間の発展を期して、当時の大平外相からハンガリー側に手渡された。その年の9月、刷り上げたばかりの辞書を胸に抱いた翌日、今岡は旅立っていった。特別な報酬や名誉を与えられることもなくハンガリーのために生涯を捧げた人生であった。このハンガリー語・日本語辞典は5万5千語から成る本格的な辞書で、2001年に大学書林から再版された。未だにこの辞書を超えるものは出版されていない。こうして今、石碑が掲げられ今岡の業績が少しずつでも知られようになるのはとても嬉しいことだ。



ところで、石碑を設置して日本人の活動を記念してもらっているのだから、日本でもハンガリーの誰かを記念できるのだろうかと思いを巡らせた。戦前に東京の公使館で活動し翻訳書などを出したメツゲル・ナードルとか、最近その名が知られるようになった彫刻家のワグナー・ナードルなどの名が頭に浮かぶ。最近は二人の業績を研究する試みもあり興味をもって注目しているところだ。

しかし、すぐに気が付いたのは、日本では石碑を設置して記念したりすることがないという事実である。それから続けて思い当たったところ、そう言えば日本ではハンガリーと違い場所や組織に人の名前を付けることもしない。ハンガリーなら歴史上の偉人であるコシュートやセーチャーニを始め通りの名前から学校名などなど、すぐに20や30の名を挙げるができる。でも日本では徳川家康通りもないし、夏目漱石学校も、聖徳太子寺もない。銅像というのもけっこう限られていて、西郷隆盛などあるにはあるがかなり少ない。最近ではほとんどがサザエさんとかゲゲゲの鬼太郎など漫画の主人公だろうか。

なぜこうなのか、そう簡単に答えがあるわけではないが、やはり日本には無常観などというのがあって、ずっと先まで何かを残すということをあまりやりたくない気持ちがあるのかなと思う。それと外壁に設置する石碑といっても日本の建物は欧州の建物よりずっと寿命が短いので、石碑を設置しても建て替えとともに無くなってしまいうからかもしれない。

もちろん、亡くなった人を記憶に留める行事がないわけではない。法事などは2、3、13、17、23、27、33、50回忌などかなり丁寧にやっているのだから。でもこれはあくまでその家族、親戚を思い起こすもので、公のものとは違う。こう思うとやはりハンガリーの習慣は日本人から観てもいいものに見える。有名な

な人の生誕記念とか聖人のお祭りとか、歴史的記念日に皆が一緒に思い起こして祝い想いを馳せることができるから、国民がひとつの家族のような感じがする。石碑の習慣は日本にないけれど、これからは何かの機会を見つけて日本でもハンガリーを記念する行事ができたらいいと思う。最後にドゥナウーイヴァーロシュの児童合唱団が「雪の降る町を」など日本の歌をとてもきれいに歌って会に花を添えた。

(うめむら・ゆうこ ELTE大学)

秋の日本冒険旅行

Horváth Dávid

私がELTE大学日本学科に入学してから日本語スピーチコンテストのことが何度も話題に出ましたが、私が優勝して日本に行くとは思っていませんでした。ところが、3年生になってこれが最後の機会なのかもしれないと思い、何も期待せずに2013年3月の第20回日本語スピーチコンテストに出場しました。そのおかげで去年の秋は人生で初めて日本に行けました。今でも夢のようです。

航空券をもらったとき、頭の中にいろいろなことが浮かびました。まず、今まで手伝ってくれた先生たちに感謝を伝えたい、それから挑戦してみてよかったということです。「いつ日本に行こうかな」、「日本では何をしようかな」と、たくさんのことを考え始めました。そしてやっと、11月に2週間、旅行することに決めました。

ちょっとだけ緊張して成田行きの飛行機に乗りました。大陸間の飛行機に乗ったことがなかったし、迷ったらどうしようと心配しましたが、私のスピーチコンテストでのテーマは「物は試し」でしたから、心配や問題を一瞬で乗り越えて旅行の日々を過ごそうと決めました。

知人から、「日本人は親切だとよく言われていますが、本当はそうではないですよ」、「東京は電車がとても複雑だけど大丈夫ですか」、「日本料理は魚ばかりで、私が日本にいたときはマクドナルドでしか食べませんでした」などと言われて、期待を少し低くしましたが、高校のときから日本について多くの本を読み、日本に留学したことがある友達の話も聞いていたので、カルチャーショックはあまり起こりませんでした。自分の目で経験すること、話だけで聞くことはずいぶん違いました。

ある日、宿泊場所の周りを歩いていた時、雨が降り始め、コートの中をかぶって歩き続けました。似たような狭い道がたくさんありましたから、ちょっと迷ってしまい、花屋さんに道を聞きました。道順がわかってお店を出た後、花屋さんに止められました。「ぬれてしまうから、これをもらってください」と傘を私にくださったのです。また、 Hostelから友達の家に移る前に毛布を買ったのですが、どこに行ったらいいかわからなくて、駅の前で人に聞いてみました。店の方向を教えてくださいただけでも十分なのに、店まで案内してくれました。

雨の中で私を追いかけてくれた花屋さん、遠いお店まで案内してくれた人。日本人は親切でなくてなんだろうと考えざるを得ません。

東京は見るべきところが多すぎて、2週間では足りません。上野

公園の動物園や国立博物館、渋谷のハチ公の像や有名な交差点、浅草寺、スカイツリーなどを見られてとてもよかったです。そして、日本に留学している友達や日本に帰国した先生に会えたのもとても嬉しかったです。そのおかげで一人では絶対行けなかった場所にも行けました。明治時代から経営されている「米久」でスキヤキを食べたことや、別の日に韓国料理を食べた後、ゴールデン街の小さいお店で日本人の学生たちと話し合ったことが、とてもいい思い出です。

新大久保で韓国料理を食べて、歌舞伎町を通過してゴールデン街へ行った晩、日本の深さを感じました。賑やかでネオンサインが多く、夜でも昼みたいに明るい歌舞伎町と、非常に狭い道や小さいお店だらけのゴールデン街のコントラストが印象に残りました。次の日、原宿の竹下通りから明治神宮に行ったときも同じようなコントラストを感じました。週末の竹下通りは華やかで変わった服装の人々が集まっています。たった一分ぐらいで代々木公園に着きました。全く田舎の森を歩いているように思いました。あんな

に賑やかな場所のすぐ隣にこんなに静かな公園があるなんて信じられません。しかも、明治神宮まで歩いていくにつれてだんだん暗く寒くなって、東京にいることすらすっかり忘れてしまいました。明治神宮には七五三が近かったので、衣装を着た子供と家族も多く、偶然にも、伝統的な結婚式も見られました。原宿駅に戻ってその日のことを振り返り、東京の深さに改めて圧倒されました。

次の日、午後8時ごろにスカイツリーにたどり着きました。2~3時間待たなくてはならないと聞いていましたが、そのときは改札口の明かりが消えていて、一分ぐらいで切符を買えました。クリスマスイルミネーションがついたスカイツリー自体も見事でしたが、350メートルの高さから見た東京の夜景は本当に素晴らしいかったです。それまで、電車などを使ってどこでも30分ぐらいで着きましたから、東京の圧倒的な大きさを感じたのはそのときが初めてでした。もっと高い450メートルまでも上りましたが、もう暗かったせいかもしれませんが、350メートルからの景色のほうがいいと思いました。

この旅行は全てにおいて貴重な経験でした。自分で経験すること、本で読んだり授業で学んだりすることは全然違うので、留学することは誰にとっても想像以上に大切なことだと思います。私はいつか日本に留学できるといいなと思っていたのですが、この2週間で高校のときに描いた夢をこれからも追いかけていきたいという気持ちが強くなりました。この旅行の機会を与えてくださった先生たち、日本語スピーチコンテスト実行委員会の皆様、JALとJTBを初めとするスポンサーの皆様感謝を申し上げます。

(ホルヴァート・ダーヴィド ELTE日本語科学生)



鋼鉄の街

Vuleta Dániel

最近、大学へ行く途中、楽しく談笑している高校生の集団とすれ違った。耳に入ってきた「受験」や「修学旅行」の言葉に、高校生時代のある懐かしい記憶が甦った。

ある秋の朝、太陽がまだ地平線の彼方から昇ってこようとしている時間だった。こんな薄暗い世界の中で、自分はもうバスを待っていた。眠い表情のままバス停におもむろに集まる学生たちと、近くの郵便局で朝早くから仕事にいそんでいる人々の姿以外、人気は少ない。この季節らしく肌寒い、いつもの秋の早朝の光景が目の前に広がっていた。バスもいつものように遅れるようだった。時刻表に書かれた時刻からは最早20分遅れていたが、自分は何でも待っていた。あの日は「鋼鉄の街」に行く為に、待っていたのだ。

「鋼鉄の街」という名を聞いたから、みんな何らかの不思議な物語の世界の街を思い描くであろう。ところが、自分の目的地は普通の街の普通の学校であった。その正式な名称はDunaújvárosである。が、「鋼鉄の街」と呼ばれる理由はちゃんとあるのだ。

そんなことを考え始めると、バスが来た。思考を止めて、足早に乗って、外で冷えた身体を車内で暖めた。そうすると、40分くらいの遅れも忘れていってしまうものだった。やがてごく自然に考え事を続ける自分がいた。「鋼鉄の街」がもし本当に何か神秘的な場所だったら、今向かっている学校は牢獄あるいは迷宮であろうという妙なことを思ってしまうのは、自分がオタクだからだろうか。といっても、この街には実際に幾つか面白いことがある。1つは、この街は百年前にはだれにも知られてい製鉄所が街を産んだのだ。そして、製鉄所と街の間には今もその「母」と「子供」のような強い関係が残っている。そこで、ふと「なぜだろう?」という質問が脳裏を過ぎって、先生に聞いた話を思い出した。

戦後、ハンガリーはソビエトの強い影響を受け、ここも共産党が支配するようになった。ソビエトの思想においては重工業の発展が重要だったが、ハンガリーは昔から農業の国で、鉱物も製鉄所も余りなかった。だから、無理矢理にでも建設しようという考えが生まれた。その時、この製鉄所で働く工員の集落として、街が建てられたのだ。それまで何もなかった場所に真新しい舗装路が敷設され、その両脇に高いコンクリートの建物が次々に現れた。工事に十数年もかかったのち、ついに街は完成した。名前はスターリンへの敬意を表すために、「スターリン町」になった。しばらくし

て、Dunaújváros(ドナウの新しい町)に変わったが、それでも、ここは長年、共産党の誇りの場所であった。

急にバスのブレーキがかかって、僕は我に返った。歴回想を中断し、ぼんやりと車窓から外を見たら、もう街の入口まで差し掛かっていた。そこには韓国の会社の近代的で巨大な工場がそびえている。バスが小さな村のような郊外を通過して、中心部が見えてくると、その風景は自分の思いを裏切った。何も変わっていない、まったく同じコンクリートの建物の群れがいつものように時間の流れに耐えていた。「建てられた時からずっとそのままだ」という印象を持った。バスが終点駅に到着したので、僕は自分の体を引きずるようにして降りて、そこの広場の向こうにある映画館の時計を見やっした。まだ早かった。でも、その建物をよく見ると、いつかの懐かしい思い出が湧いてきた。何年か前の真冬、この建築物は「映画館」と言うより「冷凍庫」と言ったほうが相応しかった。その時、暖房が壊れていて、映画を観ている間、厚い服を着ていても寒かったのだ。時間が経って、もう面白くて懐かしい思い出のひとつと思えるようになった。

一時限目までまだ時間があつたから、街外れに広がる川に面した公園に行こうと思った。ここは、この街の中で自分の憩いの場所だった。都市は高台の上にあるから、川辺まで行くためには長い階段を降りなくてはならない。階段の一番上の辺りで川のほうを見渡すと、まるで山頂に立って下を見下ろすような感じだ。そこからゆっく



りと流れるドナウ川とその向こうに広がるハンガリーの大草原が一望できる。川の灰青色と、オレンジ色に染まり出した夜明けの空と、無限に続くように感じられる草原の緑が混じって、絶景が開けていた。数分、佇んでこんな自然の美しさを鑑賞してから、近くのベンチに座って、市のほうを振り返った。自分に色々な大切な思い出をくれた街。朝日に照らされたその都市は、たとえ評判がよくなくても、自然が多く、通りが広くて、ほかの大都市とは違う、落ち着いた雰囲気のある場所だと思った。昔、この工事を管轄した建築家などが住みやすい都市をつくらうと思ってこの街を設計したおかげだろうか。今、まだ彼らが生きているなら、どう思っているのだろうか。僕は携帯電話の時刻表示を見て「そろそろ行こうか」と呟いて、名残惜しい気持ちを胸に、学校のほうへ立ち去った。

あの時以来、あそこには行ってない。最近あの景色を思い出すと、もう一度あんな静かな夜明けをあそこで観たいという気持ちになる。いや、今度は自分が見たいというより誰かに見せてあげたいという不思議な気持ちに心が満ちた。あれを観て、自分のようにあの場所のことを好きになってくれる人がいつか現れるのだろうか。

(ヴレタ・ダーニエル ELTE日本語科学生)

留学生自己紹介

ハンドボールのコーチングを学びに センメルヴァイス大学体育学部聴講生 井上 元輝

僕は筑波大学大学院博士前期課程を休学して、現在センメルヴァイス大学体育学部の聴講生という立場で留学をしています。そもそも留学に興味を持ち始めたのは、大学4年生時に卒業論文としておこなった、ハンドボール競技におけるヨーロッパと日本とのプレーを比較したことがきっかけ



でした。

日本のハンドボールといえば、宮崎大輔選手や2008年の北京五輪アジア予選の際の中東の笛で話題に挙がることもありましたが、まだまだマイナースポーツですし、オリンピックに関していえば、1988年のソウル五輪以来出場を逃しています。映像を見るだけでもヨーロッパのハンドボールのレベルは、日本のそれとは全く違っていません。選手を引退した後に指導者を志すにあたって、やはり本場であるヨーロッパのハンドボールを肌で感じるべきだろうと思うようになりました。日本の指導体制は学校部活動が主体であるため、なかなか一貫した指導がなされていないという印象が強いです。そこで留学を通して、ヨーロッパの一貫したトレーニング体制を学んで、自分自身のコーチング哲学の一助を得たいと思いました。

ハンガリーにコーチング留学することを決めた理由は、世界ランキング4位だということ、ハンドボールのコーチングで日本人

がまだ来たことがないことです。世界ランキングが上位の国々の中では人口が少ないので、一貫したトレーニング体制があるのではと考えました。また、ヨーロッパの中では比較的ハンガリー人の体が小柄で、日本に似ていると考えたからです。

現在は大学のハンドボールの実技と座学の授業を聴きながら、ブダペストにある中学生年代の選抜チームの練習を見学させてもらっています。自分自身もハンガリー3部リーグに所属するセンメルヴァイス大学のチームに参加させてもらいながらプレーもしています。また、センメルヴァイス大学には、国際オリンピック委員会が認めているインターナショナル・コーチング・コース(ICC)があって、ICCのハンドボールを英語で学ぶことができます。全部で2年間留学する予定ですが、最後の年にはICCのライセンスを取得したいと考えています。2年という期間は、1シーズンのトレーニングを2回見たいと考えたからです。

ブダペストには7月から滞在していますが、一番苦労していることはやはり言葉です。大学の先生や一部の学生とは英語で交流出来ていますが、英語の話せない中学生年代、小学生年代のキッズの子たちとコミュニケーションを取るには、ハンガリー語がかかせないとこの4ヶ月で痛感しました。自分がプレーするぶんには、簡単な英語やジェスチャーだけでなんとかなっていますが、いざコートの中に入って日本式のトレーニングを教えてくれと言われたら困ってしまいます。そこで年明けからハンガリー語の教室に通うつもりです。また、ICCのために座学を英語でこなせるようにもならなければならず、日々言葉とは戦わなければなりません。

まだ4ヶ月しか経っていませんが、日本を出てみて日本の良いところ悪いところが少

ずつ見えてきました。それはハンドボールに関しても同じです。体型的に劣る日本人がヨーロッパ諸国の大きい相手にどのように戦っていくかということを常に考えていますが、日本人の誠実さや勤勉さ、俊敏さといったものが武器になってくるだろうと感じています。しかし、育成理論や細かい方法論はこちらの方が優れているので、そこを上手に吸収して日本に帰国したいです。

ハンドボールの話ばかりになってしまいましたが、ハンガリーには色々な分野の日本の方がいらっしゃいます。日本にいた頃には絶対に関わらなかったであろう、音楽、ダンス、医学など他の分野で頑張る日本の方と知り合うことができ、とても良い刺激になっています。それに困ったことがあれば気軽に相談させてもらえますし、ブダペストは住み心地の良い場所になってきています。まだまだ始まったばかりの留学生活ですが、この環境で学んでいることを両親に、支えてくださっている全ての方々に感謝しながら、初志貫徹していきます。

(いのうえ・もとき)

オペラ漬け

リスト音楽院大学院オペラ専攻

今井 文音

家族、友人、日本にしばしの別れを告げこの地に降り立ってから2年が過ぎました。私は日本の音楽大学を卒業後、フリーターをしながら今後の自分の音楽生活についてどうすべきか途方に暮れていました。しかし、考えるだけでは何も進まず、かといって音楽から遠ざかる生活がどうしても嫌だったので、母校の音大に研究生として半年間在籍しました。その時に丁度、特別講師としてレッスンにいらしゃったのが今の声楽科の先生です。その先生からお声を掛けて頂き、ハンガリーに留学することになりました。

初めの1年はペーチ大学のオペラ科に在学していました。学校は私以外全員ハンガリー人です。家もハンガリー人の女の子3

留学生自己紹介

人とルームシェアをしていました。英語も満足に話せない、ましてやハンガリー語なんて全くわからないという状況で私のハンガリー生活は始まりました。

やはり言葉の壁は分厚く、ハンガリー人の中には英語を全く話せない人もいますので、そういった人とはコミュニケーションが全く取れない状態でした。しかし、早くみんなと話がしたいという思いが強かったので英語もハンガリー語も勉強し、少しずつ友達ともちゃんと話せるようになりました。学校の友達もルームメイトも皆とても親切で優しく、今でも忘れられない思い出がたくさんあります。

そして、1年が過ぎた頃、先生がリスト音楽院へ転動することになり、私も一緒に転校することになりました。「リスト音楽院のオペラ科はとても忙しい」と聞いてはいましたが、実際に入ってみると想像以上でした。歌唱の先生とのレッスン、伴奏の先生とのレッスン、指揮者の先生とオペラの中の役を勉強するレッスン、演出の先生による舞台演習のレッスンがそれぞれ週2回ずつあります。学期末にはアリア試験とオペラ試験があります。アリア試験が終わるとオペラ試験のリハーサルが約1ヶ月間朝から夜まで休みもなしに毎日あります。オペラ漬けです。

私はハンガリーに来てから初めてオペラを勉強しました。オペラにはもちろん素晴らしい声やテクニックも必要ですが、やはり演技力がなければいけないだと身をもって実感しました。演出の先生はとても斬新な演出をする先生なので日本ではなかなか考えられないような演技や動作を要求されます。ハンガリー人はとてもセンスが良く、演技も自然で舞台上での動作もとても上手です。

最初は戸惑ったりわからなかったりしたことも多かったのですが、演技も歌と同じで、練習すれば上手になるということもわかりました。

そして、年の6月、学年末のオペラ試験が

なんと夢にまで見たオペラハウスで行われました。いつも客席から見ている側だった自分がまさかあの大きな舞台に立つなんて誰が想像できたでしょうか。初めてステージから客席を見たときの感動は、まるで映画の中にいるような、言葉には表すことのできないものでした。

しかも、私はありがたいことに、大きな役をもらうことができました。ところが、歌はハンガリー語、そしてハンガリー語の台詞もたくさんあったのです。ハンガリー人の前でハンガリー語の台詞で演技をしてハンガリー語で歌う…もう、どう頑張ってもごまかすことなんてできません。もちろん、どんなオペラでもごまかすことなんて許されませんが…。

オペラの稽古が終わった後や空時間はとにかく必死に練習をしました。時にはうまくできない自分に悔しくて涙を流したこともありましたが、先生方やオペラ科の仲間たち、友達たちの協力と支援のおかげで本番はミスをする事もなく、大成功に終わりました。お客さんからの拍手を聞いていると頑張ったよかったと心から思いました。ひとつのものをみんなで作り上げる作業というのは、こんなにも大変で、でも楽しく、そして達成感がものすごい、こんなにも興奮するものなのかと感じました。私はすっかりオペラの虜になってしまいました。今までは



見る側でしたが、今度は自分が演じる立場として虜になってしまいました。

ハンガリーに来てから経験したことのないことをたくさんさせてもらい、そして可能性を最大限引き出そうとしてくれる先生方

にはとても感謝しています。もちろん、日本で応援してくれている家族や友人、そしていつも支えてくれるたくさんの人たちにも本当に感謝しています。

2年前、日本から飛び立ち、いざハンガリーに到着しようというその時、飛行機の中からブダペストの街並みが見え、私は不安でたまらず一人で泣いていました。しかし、今はハンガリーに来て本当によかったと思っています。何度見てもため息が出てしまうほど綺麗なドナウ河を見るたびに、ここに居る喜びをひしひしと感じます。でも、やはり歌っている時が一番幸せです。

残り半年ほどの学生生活ですが、悔いの残らぬよう、そして夢は大きく!これからも日々精進して頑張りたいと思います。

(いまい・あやね)

僕の散歩道

Balassi Intézet

宮原 孝治

ハンガリーに来て4ヶ月経ち、段々と寒くなり、雪が散らつき、いよいよ本格的な冬がはじまりました。ヨーロッパ・ハンガリーでの初めての冬です。

私は東海大学文学部ヨーロッパ文明学科に在籍し、卒業論文でハンガリーの民族音楽について扱っています。初めてハンガリーの民族音楽に出会ったのは、大学1年生の時に授業で聴いたハンガリー民謡です。何処と無く悲しげな雰囲気と、ハンガリーの大平原と農民たちの素朴な暮らしが目に浮かんでくるような印象を受けました。それ以来、ハンガリーの民族音楽に興味湧き、卒業論文を執筆することにしました。しかし日本で得られる情報は少なく実際にハンガリーに住んでみて、語学を学びながら、民族音楽について研究してみたいと思い留学を決めました。

9月からバラッシでの授業が始まり、様

留学生自己紹介

々な国から来た留学生とともに学んでいます。授業内容は教科書を用いたハンガリー語の文法や会話の練習、その他にゲームを行ったり音楽を聞いたり、クラスメイト同士が自分の出身の国や街について発表し話し合ったり、様々な形式で行われます。授業のペースが速いので、授業が全てハンガリー語で行われるので、苦労しますが、毎回とても楽しく充実しています。そして、覚え



たハンガリー語は寮や街で積極的に使うように心掛けています。最初の頃は、一生懸命ハンガリー語で注文したり、尋ねたりしても、私の語学レベルが低すぎるので相手が英語で答えて来て、毎回悔しい思いをしていました。しかし最近はずいぶんハンガリー語で相手と会話する事が出来るようになり、街中や寮でも以前よりハンガリー語で会話する機会が増えました。しかしまだ相手の言っている事が聞き取れなかったり、文法や単語が間違っていたり不完全ですが、少しずつ自分のハンガリー語が上達しているのが実感出来る毎日を送っています。また、民族音楽のコンサートやターンツハーズ、国立歌劇場やオペレッタ劇場、教会で行われるコンサートにも頻りに出掛けています。

バラッシの寮はゲレルート山の麓に位置していて、なのでツィタデッラへはよく散歩

がてらよく出掛けます。展望台から眺めるブダペストの景色は大好きです。真ん中にドナウ川流れ、ブダ側の丘には王宮、マーチャーシュ教会が立ち、ペスト側には国会議事堂、聖イシュトヴァーン大聖堂、賑やかなペストの街並みが見えます。そして、その間がマルギット橋、くさり橋、エルジェベート橋、自由橋とそれぞれ個性的で素敵な橋で結ばれている。「とても素敵な街だ!」いつも感じます。日本にいる家族や友達に見せてあげたい景色です。

ハンガリーはヨーロッパの中でも、とくに食文化が豊富な国だと思います。食文化が豊富な国に来たら市場へ出掛けるのが一番だと思います。放課後や土曜日に中央市場へはよく出掛け、野菜や果物、肉やサラミ、ワインやパーリンカを買い、2階のビュッフェではクーヤーシュやハラースレー、パプリカチルケ、マルハ・ポロコルト、パラチンタ、ランゴシュなど大好物なハンガリー料理を食べるといのが定番コースです。

もう一つ私がよく立寄る場所はブダペスト東駅です。私は幼い頃より鉄道に乗るのが好きで、今でも頻りに鉄道旅行をします。東駅は西駅や南駅よりも国内長距離列車や国際列車が多く発着し、毎日多くの旅人達で賑わっています。ホームには長距離でやって来た列車が電気機関車に引かれ、やれやれといった感じにゆっくり止まる。夜行列車が発するホームでは見送る人と見送られる人、恋人達が抱き合い、手を触れ合いながら別れを惜しむ。その姿を尻目にテールライトを残して列車は出発して行くという何ともいえない郷愁が漂う光景を見ることが出来ます。日本ではなかなか目にすることが出来ない光景になってしまいました。ハンガリーでは今でも目にできます。その光景を私は指を加えながら眺め、今にも目の前に止まっている列車に飛び乗り、旅に出たい気持ちを押しさえています。

クリスマスにはトランシルヴァニア地方へ出掛ける予定です。私が研究している民族音楽や民謡、民族舞踊の多くは現在ルーマニアになっているトランシルヴァニア地方のものです。またこの地域には多くのハンガリー人が伝統文化を大切にしながら生活

をしています。今回はカロタセグ地方にある小さな街に数日間滞在しクリスマス祭りに参加します。貴重な体験であり、また留学しハンガリー語を学んでこそ出来る体験だと思うので今からとても楽しみにしています。

留学生活は三分の一が終わりました。残りの期間も充実した日々を送れるように全力でがんばって行きたいと思います。もし街で見かけたら気軽に声をかけてみて下さいね。

(みやはら・こうじ)

出会いの留学

リスト音楽院大学院2年チェロ科

白井 彩

2010年の夏からオンツァイ・チャバ教授のもとリスト音楽院で勉強しています。ですが実は、東京芸術大学2年生の時(2007年)に休学して1年ハンガリーに来たのがスタートでした。この時もオンツァイ先生の元で学ぶ予定だったのですが、先生がアメリカの大学で数年教えることになり、メズー・ラースロー教授(バルトークカルテットチェロ奏者)や妹さんのメズー・マルタ先生にお世話になりました。その1年は本当に貴重な体験でした。初めての一人暮らし、異文化、一週間に2回のソロレッスンはどれも大変でしたが、教わる内容が新鮮で全てが色鮮やかでした。精神的にもかなりタフになったと思います。1年とは言っても10ヶ月程の滞在で、この時の濃い留学は帰国後もずっと忘れられず、日本でハンガリーシックになってしまい、ハンガリーの曲ばかりを勉強してしまい、日本の先生も呆れていたと思います。

再度留学を決めたきっかけは、自分の演奏にまだまだ自信が持てなかったため、前からお世話になっているオンツァイ教授のもとで学びたいとかがえたからです。オンツァイ先生の勧めで大学院に入り、気持ち新たに弾き方をリニューアルできる機会にもなりました。昔と違い吸収するのに時間がかかり、癖を直すために上手く弾けなく

留学生自己紹介

なってしまった時もありました。でも、そんな時はハンガリーの世界遺産の通りや鎖橋を散歩したり、大きな温泉に3時間くらい入ったり、美味しい物を大量に口に詰め込んだりしていました。

ハンガリーでは、ヨーロッパの有名な方に出会える機会が多くて、すごく得をしたような気持ちになります。食べ物に関して言えば、日本食はやはり最高だと思いますが、近所の市場で新鮮なものがすぐ手に入るし、めずらしい野菜にもあえるので買い物がとても楽しいです。交通の便も良く安く乗り放題ですし、自然もすぐに堪能できます。もちろん、日本より人々がゆったりしていることもありますが、こちらにいるとあたりまえに諦められるのも不思議です。心に空間が生まれてリラックスすることを覚えて、そうしたら本当に自由な気がしました。

変な例えですが、80歳の先生に室内楽のメンバーで予定が合わずにリハーサルできなくて…と悩みを相談したところ、「いつも思い通りに行かない、それが人生だよ〜はははは」と笑っておられました。その時に、「あまり思い詰めなくてもいいんだ」と肩の力が抜けたのを覚えています。

レッスンについては、過酷ですが幸せな生活を送っています。以前よりも状況が分かっている分、欲張りになってしまい、ソロのレッスンの他に室内楽のレッスンを年々どんどん増やしてしまいました。最初1グループだった室内楽、今では4グループもかけ持ちし、月曜日から金曜日までソロレッスンも含めると7回もレッスンを受けていま

す。1ヶ月にすると30回もレッスンを受けていることになります。毎日、次の日の練習とリハーサルに追われつづけ半年が経ちますが、次第に限界が見えてきました。でも、日本では到底このようなことは不可能ですし、他の国でも週にソロのレッスンを2回受けさせてくれる国も滅多にありません。室内楽とり放題なところは珍しいと聞きます。もし、いろいろな人にレッスンを受けたいと



思っている方がいたら、ハンガリーはベストな国かもしれません。何と言ってもやはり先生方の演奏、それに人柄が素晴らしいです。80歳になっても教えて下さる初代バルトークカルテットの先生方はじめ、29歳の才能溢れ熱心な先生もいらっしゃいます。どちらの先生も生徒にとっても親身に接してくれますし、お話はいつもためになることばかりです。

室内楽のリハーサルでも、面白い体験がありました。ハンガリー人ばかりなのでもちろんハンガリー語のみ、これのおかげで思だけは伝えなければと頑張っているの

すが、そんなリハーサルの中で、ピアノ奏者R君がとても上手なのですが、急に即興で不思議な空間を作ったかと思ったらヴァイオリンの子突然チガーヌを弾き始め、ヴィオラが裏うちを始めたので、私もバスで急遽加わり面白いことになりました。これがいわゆる「音楽」だと思つてとても嬉しかったのを覚えています。体で音楽を楽しんでいて、きっとこれが珍しいことじゃなくて皆が当たり前に面白く感じる事なんだと思うと、本当に羨ましかったです。私もそんな心持ちを日本に帰っても忘れないでいけるように今のうちにしっかり楽しみたいと思います。

今年がついに学生最後の年になってしまいました。大学院2年生はディプロマコンサートという、いわゆる卒業リサイタルを1時間半〜2時間程度のものをしてはいけません。幸いにも私は改装が終わったリスト音楽院本校の大ホールで開催出来る機会を頂きました。せっかく選んで頂いたので、期待に答えられるよう精一杯挑戦していきたいと思います。日には5月8日15時から予定しています。もしご都合の合いそうな方は、ハンガリーものを含んだ楽しめるプログラムになる予定なのでぜひお立ち寄り頂ければと思います。

振り返ってみると、周りには素敵な先生たちや、刺激を与えてくれるハンガリー始めヨーロッパで留学している友だちとの出会いがあったなと思いました。これからも出会いを大切にしていきたいです。

(しらい・あや)

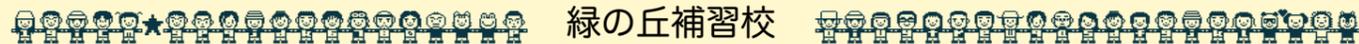
編集部よりのお知らせ

ドナウの四季

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書をお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。



緑の丘補習校

ラパイ 絵梨香 (高等部2年)

幼い頃から毎日挫けず努力を重ねて、「将来ピアニストになるんだ!」「お医者さんになりたい!」「サッカー選手になるぞ!」と宣言できる人達が持っていそうな未来像、そして夢の実現に必要な行動力が、今の私には不足している。将来に備えて継続的に勉強できる人に対して嫉妬を覚えることがある。「自分は生まれてから17年間何をしてたんだろう・・・」と呟やいたりする。何か一つずつ抜けて優れた才能に恵まれたい!と願うことも多いが、当面は他人が向上していくのを見守る中、充実感が無い毎日が過ぎていく。

私は一昨年9月に第一志望だったハンガリーの高校へ入学し、昨年4月から、みどりの丘日本語補習校を後にした私達卒業生の意志を汲んで新たに設立された高等部で、月に2回行われる国語の授業に通っている。

高等部に進学してから2年目となる今、私はどれだけ成長できたのか気になる。何処がどう伸びたか。自分自身ハッキリとした答



えが出せないが、想像していたよりもずっと厳しかった2年間を経て、私の世界観が変わったことには間違いがない。毎回補習校の建物に足を踏み入れる時、廊下を楽しそうに走り回っている他の学年の生徒達を、何故か(補習校の一生徒であった頃とは違って)外部から客観的に観察して自分に気が付く。自分も同じ生徒であって良いのか、少しは大人っぽく振る舞うべきか。子供と大人の狭間に居る存在としての義務は何か、等々考えている最中、低学年の子達が馴れ馴れしく、私に他愛無い話を持ちかけてくる様子を見て、先ずは一安心した。別に私のことを違う眼で見る訳でもないようなので、とにかく嬉しかった。

一方、街中をボーっと歩いている際に知り合いなどに会うと、「久しぶり!」の次に来る言葉が、最近なぜか「大学は何処にす

る?」になってしまっている。1年後は遠い未来の話だと思っていたが、どうも真剣に考え始めた方が良さそうだ。

うまく思考がまとまらないのだが、高校で所属している合唱団はプロと言われるほどの団体で、平日の夜や週末にもしょっちゅうコンサートが入る。地方公演に出掛けることもよくある。そのため自分の強い意志で通い始めた補習校高等部に、思うように通えないジレンマに悩まされる。まさかこんなに合唱の練習やコンサート、地方公演が入るとは、高校入学前は知る由もなかった。蓋を開けてみて驚いたのである。この現実には上手く対応できないまま、私はここまで来た。本当は自分の意志に従って、ゆっくりとした歩調ではあるが確実に一歩一歩進んで来たかったのだが、一度踏み入れてしまったこの環境は、自分の意志でどうにかなるものとも違うのである。糸の切れた凧のように、私もコントロール不能の状態になっているのかもしれない。けれど慣れなのか諦めなのか何なのか、現状をとことん嘆いている訳でもない。

それは合唱旅行で得るものも大きく、出席が時々になってしまっているけれど、日本語の国語の授業から学ぶことは計り知れなく、高校生一人分以上は頑張っているかもしれないと思う気持ちが、心のどこかにあるからかもしれない。

母によく言われるのは、「長期的な目標を達成する過程において、中短期的な目標を掲げて、それらを一つずつ達成させていくようにすれば、かなりしっかりした人生設計ができるので、いつも何らかの目標を掲げてたゆまなく努力し続ける姿勢が大事である」、ということだ。これを私に当てはめると、例えば長期的目標がいずれ日系のとある企業に就職することだとしたら、それに向けて進む過程での中期目標が、第一志望の大学に進学することに当てはまると思う。そして、短期的な目標の一つは、漢字検定に合格することである。そんな訳で随分迷った挙句、2014年2月2日(日)に、漢字検定2級を受検することにした。既に申し込んでしまっているので、もう後には退けない。密かにいずれは1級にも合格したいと考えている私は、一歩一歩漢検の級を上げて行かなくてはならないと考えている。「天才」と呼ばれている人でも、「1パーセントの才能と、99パーセントの努力」と言われているくらいだから、ずば抜けた才能がない私が成功を目指すなら、とにかく歩を緩めず進んでいくしかないのである。

(らばい・えりか)



ハンガリーで身についた「粘り強さ」 松沼 綾子

2011年4月、ブダペスト日本人学校に赴任する主人と共に、当時7ヶ月半の一人息子を連れてのハンガリー生活が始まりました。毎日があっという間に過ぎていき、気づけば滞在3年に近づいています。

飽きっぽい性格の私は、継続するとか努力し続けるというのは苦手なのですが、ハンガリーに来てから2つの「粘り強さ」が身につきました。一つはハンガリー語でのやりとり、もう一つは・・・文字通り粘り強い食べ物、納豆づくりです。

ハンガリー語は、習い始めて2年半以上になります。始めた当初は、一から十まで言うのがやっとという状態でした。でも、ベリさんの分かりやすく楽しい授業が進むにつれて、少しずつ生活の中で使えるようになってきました。対面式の肉売場で、覚えただけの文章を使って量り売りの肉を買えたときの緊張感と達成感は今でも覚えています。恥ずかしがらず、諦めずに言ったり書いたりすることで何とか分かってもらえることも嬉しかったです。ハンガリーでは、小さな子供を連れていくと「かわいいわね。男の子?何歳?」と、多くの人が声を掛けてくれたりベビーカーを乗せるのを手伝ってくれたりするところはハンガリーの素敵なお店です。そんなとき、ハンガリー語で会話したいという思いがさらに強くなります。ハンガリーでの生活は限りあるものですが、最後まで粘り強くそして楽しく学習し、実践したいと思います。

納豆は、今年の秋から続けている、私の「粘り強い」得意料理です。

納豆は子供のときから好物で、本当によく食べていました。ハンガリーでは納豆は高価なものですが、食べられるのはありがたいことです。自分で作るようになるまでは、たまに1パックを家族3人で分けて少しずつ食べるのが楽しみでした。

昨年の秋、転機が訪れました。「納豆が作れるって聞いてやってみただけで、うまくいかなかったわ。」という友人の一言で

す。本当に自分で作れるのかしら??

インターネットで調べてみると、特別な器具なしで納豆を作る方法があることが分かりました。挑戦1回目は粘りけが少なく大成功とは言えませんでした。繰り返すうちに満足いく納豆ができるようになりました。自分なりに試行錯誤してできたレシピは次の通りです。

1. ふたつきの大豆保温箱を作る。(段ボール箱に梱包用プチプチを貼り付けるなど)
2. 乾燥大豆1カップを7~8時間水でふやかしてから、大豆が指で簡単につぶれるくらいまで茹でる。(圧力鍋があると早くできる。)
3. 茹であがる少し前に、別の小鍋でお湯を沸かし、ふたをして鍋ごと保温箱の中に入れておく。(保温箱の温度を保ち、大豆の発酵をすすめるため)
4. 茹であがったら、鍋のゆで汁を、大さじ2ほど残し捨てる。(大豆とゆで汁少々はまだ鍋に入れたまま)
5. 熱い大豆の中に、市販納豆(冷凍可)5~10粒を入れて手早く混ぜる。(少量のゆで汁があることで納豆菌が全体につく)
6. キッチンペーパー4枚を敷いた清潔なプラスチック製密閉容器に大豆を移す。
7. 6の容器にキッチンペーパーを2枚かぶせ、その上にプラスチック製密閉容器のふたをずらしてのせる。
8. 7を保温箱に入れる。(お湯が入った小鍋の隣)
9. 8時間後と16時間後くらいに、キッチンペーパー2枚と小鍋のお湯を交換する。
10. 保温をし始めてから20~24時間後にできあがり。

私の場合:金曜日の夜大豆を水に浸す。土曜日の朝8時に圧力鍋で大豆を茹でて納豆づくり開始。午後3時か4時にお湯を換え、夜寝る前にもう一度お湯を換えると、日曜日の朝できあがり。

大粒でにおいも強く、醤油で食べる自家製納豆はとってもおいしいです。皆様も、納豆づくりに挑戦されてみてはいかがでしょうか。

私にとって、海外生活はもちろん育児も初心者です。来ハン当初を思い出してみると、きっと大丈夫!と思う楽観的な自分と、何かあったらどうしよう・・・と不安でいっぱいの方がいました。でも、本当に多くの方々を支えて頂いて不安も少しずつ消えていき、少しですができることも増えました。日本にいたときももちろんですが、ハンガリーに来てますます、自分が生活できるのは皆さんのおかげと強く実感するようになりました。本当に感謝しております。感謝の気持ちを忘れず、自分の経験を生かして少しでもまわりの方々のお役に立てるよう、努力していきたいと思えます。

(まつぬま・あやこ)



スポーツ行事・運動サークル情報

ゴルフ部

<13年度、公式行事活動報告>

- 月例会 <優勝> <2位> <3位>
- ・8月 町野(マゼールズ ｷ)、川口(日本人学校)、北折(竹中工務店)
- ・9月 竹田(同志社大学)、阿部(大気社)、竹内(尚)(マゼールズ ｷ)
- ・10月 渡辺(Suzuki Vilag)、北折(竹中工務店)、辻(日清食品)
- ・11月 竹内(寿)(マゼールズ ｷ)、藤田(伊藤忠)、竹山(RYOWA)

- 第19回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権(秋季大会)
- =ゴルフ部後援=

優勝: 竹内(寿)(マゼールズ ｷ)、2位: 飯尾(大吉)、
3位: 柿崎(マゼールズ ｷ)

- 第4回日本人ゴルフ部 年代別対抗戦

優勝: 40歳代、2位: 20, 30歳代、3位: 50, 60歳代

<部員募集>

月例会ゴルフコンペ、マッチプレーなどの各イベント、週末の練習会などを精力的に実施しております。

ビギナー、女性部員も大歓迎ですので、ゴルフにご興味のある方は下記連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。

(連絡先: ユーラシア・ロジスティクス 高松
yoshihiro.takamatsu@eurasia.hu)

日曜テニス部

現在の部員数: 21名(男性17名、女性4名)

活動場所と時間帯: 毎日曜日午前9時~11時
Match-point tennis Club
(http://www.matchpoint.hu/english/main.html)

本年度の実施予定活動: 日曜日
: テニス以外の各種親睦会(随時)

幹事連絡先: 伊勢雅尚メールアドレス
(m.ise@idakaecurope.cz)

部員募集: 現在は部員数が多く、基本的に募集をしておりませんが、但し、「女性で初心者」は別途相談とさせていただきます。幹事まで一報ください。

バドミントン部

部員: 中学校の体育館の2面を借りて、毎週日曜日に2時間程度の活動をしています。運動不足の素人おじさんに加え、女性と子供が数名で合計10名前後です。その他、時々参加される方が10名程います。

場所と時間: 毎日曜日の午後4時から2時間。
中学校体育館(ブダペスト2区、Kokeny u. 44.)

内容: はじめの30分間は練習、その後ダブルスの試合を行っています。経験者も数名いるので、初心者への打ち方指導もやっています。

ラケット: 会場で貸し出し出来ますので、室内シューズを持ってきて頂ければいつでも参加可能です。

参加費: 当面1,000HUF/人(試合に参加しない子供はタダ)でやっています。

その他の活動: ウィーン日本人バドミントンクラブとの交流会、飲み会など。

代表者: 池田耕平

問合せ先: hujpbad@gmail.com



CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
Inner Design Group · 1021 Budapest, Bognár utca 7.
Tel/Fax: 1-200 3213 · Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu



コルナイが綴る 20世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中! ◆定価 4935 円(税込) ◆A 5判 / ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■定価 3045 円(税込) A 5判
■ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは20世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー:旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円

初外国人ダンサーは 日本人!



初外国人ダンサーは日本人!

すでにご存知の方々もいらっしゃると思いますが、現在日本人ダンサーの片倉 麻里衣 (かたくら まりー) さんが、Budapest Táncszínház (Budapest Dance Theatre) に初めて外国人ダンサーとして所属しています。当然ながら、外国人は片倉さんのみ。ハンガリー人ダンサーと一緒に素晴らしい活動をされています。

【公演日程】

- ★国立ダンス劇場 (Nemzeti táncszínház)
- ・1月5日 16:00 80日間世界一周
- ・1月26日10:30 80日間世界一周
- ・1月28日19:00 Flabbergast / Black and Light / ボレロ
- ・2月2日 公演時間未定80日間世界一周
- ・2月11日 公演時間未定Chokolade / Time
- ・2月21日 公演時間未定 新作公演
- ★地方公演
- *1月4日(土)19:00 『ボレロ』 舞踊コンサート (ソルノク市)

<https://www.facebook.com/events/636474463069874/?ref=5>

*3月18日 80日間世界一周

*3月20日 80日間世界一周 (エゲル市)

*3月26日 80日間世界一周 (ヴァーツ市)

○公演情報は随時掲載が更新されていますので、ご確認の上お出かけになられてください。

Facebook HP: <https://www.facebook.com/budapestdancetheatre>

ダンスカンパニーHP: <http://www.budapestdancetheatre.hu/>

○プロモーションビデオにも出演されています。

http://www.youtube.com/watch?v=fHi-22HWBWg&feature=youtube_gdata_player

【片倉さんメッセージ】

私の所属しているこのカンパニーは、モダンダンス、コンテンポラリーのカンパニーです。2種類の公演タイプがあります。一つはダンス公演。(ボレロや春の祭典など) もう一つは子供達を対象とした公演。(80日間世界一週、くるみ割り人形、ホレおぼさ

んなど)

子供達を対象の公演は、ストーリーテラーもいて、物語が分かりやすくなっています。

もちろんダンスメインですが、ダンスを観たいというよりも、子供たちに楽しんでもらえるプログラムになっています。是非、会場へ足を運んでいただけたらと思います。このダンスカンパニーでは、朝にはダンススクール、夜はオープンクラスも平日に開催されています!

(18-19:30まで) どなたでも気軽に受ける事ができます。私自身もオープンクラスへは、時折ディレクタークラスもある事から、ほぼ毎回参加しています。皆さんも気軽に参加されてはいかがでしょうか。

【片倉 麻里衣 KATAKURA MARY】

日本にて熊川哲也主宰『K-Ballet school』に1期生として入学。

上級クラスに数年在籍して卒業し、卒業後MTFへ5ヶ月間の短期留学。

日本で大学(普通の4年生)を卒業したあと、再び海外で踊りたく、色々探していた時に今のカンパニーに出会いました。